

展示名 / 「相島と朝鮮通信使パネル展」

共同発表者 / 今村 公亮(相島歴史の会事務局長)

豊島 茂(和歌山大学国際観光学研究センター 客員フェロー)

石川 泰成(九州産業大学地域共創学部 教授)

展示期間 / 2024年11月07日(木)～11月29日(金)

展示会場 / 九州産業大学図書館1階展示コーナー

展示テキスト / 韓国釜山から49.5km、晴れた日には釜山の高台どこからでも日本の地である対馬が見えます。日本本島より韓国に近いという理由で「国境の島」と呼ばれています。今年8月1週目の週末、対馬の中心地である厳原港一帯はホテルと民宿の部屋が満室でした。福岡空港と対馬を行き来するエア便も早い時期から昼間の時間帯が満席でした。「対馬厳原港まつり2024」と朝鮮通信使船・復元船の見学会、そしてその行列が再現される事に島外からの観光客が押し寄せました。結局、厳原中心から10km以上離れている驚くほど寂れた築50年以上の民宿を予約し、早朝の航空便に乗り取材に行くことができました。この朝鮮通信使の関連企画は厳原港まつりのメイン行事として1980年から始まりました。この行事では、朝鮮通信使を通じて日韓交流の継承と発展を誓い、江戸時代に橋渡し役をした先祖たちの栄光を蘇らせるという大きな意味があります。朝鮮通信使は豊臣秀吉の朝鮮出兵で断絶した国交の回復のため江戸時代に朝鮮王朝から日本に派遣された外交使節団であり、1607(慶長12)年から約200年の間に12回来日しました。対馬藩は両国の国交回復を仲介し、通信使を受け入れる窓口役を担っていました。通信使の来日人数は、正使・副使・従事官の三使に加え、学者や文化人、芸人など総勢400～500人ほどが、現在のソウル(漢陽)を出発し釜山、そして船(朝鮮通信使船)で対馬、壱岐、相島、下関、大阪などを経て江戸に向かう先々で、学術・芸術・産業・文化など様々な分野で交流が開き、両国の友好をつかさどりしました。2024年8月4日(日)朝鮮通信使行列の直前、対馬博物館では「国書交換式」が行われ、宗対馬守側からは「今後も朝鮮通信使の『誠信交隣』の精神を広く発信し、日韓交流を確固たるものとする」、韓国正使側からは「困難があっても、日本では対馬が、韓国では釜山が中心となり、通信使の価値を未来世代に継承していきたい」などと書かれた国書を交わしました。200年に渡り、江戸時代『誠信交隣』を基盤にした友好関係は近年、朝鮮通信使の努力と価値を棒に振ってしまいました。日韓両国とも多様なメディア環境の変化により一層、解けることよりもねじれたことが多いです。時代を超越して存在する複雑な日韓の関係は美しい風景ではありません。日韓を纏わる象徴的な媒介と思ったのは対馬とその海峡、そして朝鮮通信使であります。その全ての関係性は波のしぶきのような刹那かもしれないが、両国『誠信交隣』の気遣いが必要な時代であることは間違いないと思います。この写真は2024年の対馬、相島、下関で撮影した写真です。



写真上、下

600×900mm Digital pigment print, acrylic plate

朝鮮通信使の再現行列(下関市唐戸町)2024.08



写真1列左、右、2列左、右（長崎県対馬市厳原町久田道）2024.08 _ 写真3列左（福岡県糟屋郡新宮町相島）2024.08
写真3列右（山口県下関市唐戸町）2024.08 _ 写真4列左、右（山口県下関市赤間町）2024.08
600×900mm Digital pigment print, acrylic plate